

研究生生活の回顧

著者	平野 蕃
雑誌名	農業経済研究報告
巻	13
ページ	83-94
発行年	1974-07
URL	http://hdl.handle.net/10097/33294

研究生生活の回顧

*平 野 蕃

目	次
(1) 満鉄時代（前号）	(3) 東京時代
(2) 敗戦前後	(4) 東北大学時代

(2) 敗 戦 前 後

第二次大戦も、開戦以来三年目を迎えて、漸く敗戦の色が濃くなるにつれて、満鉄調査部の職員にたいしても、第一線の輸送現場に配置転換を命ぜられる研究員がみられるようになった。私は、今さら鉄道駅の出札係というわけにもいかず、社命によって、食糧関係の物資動員計画の実施機関である満洲農産公社というところに転出することとなった。

手もとにある私の履歴書によると、昭和十八年十二月末日をもって、満鉄を退職し、公社参事を命ずとなっている。このときから、私の研究生生活に空白時代がしばらく続くのでそのことについても二、三回顧しておくこととする。

敗戦の色が、刻一刻と濃厚になった昭和二十年七月中旬に、私は召集令状を受けとって吉林省の敦化^{トンカ}という街にある部隊に入隊することとなった。入隊といっても、別に兵舎があったわけではなく、満人（中国人）の初級学校の校庭を借りうけて、後続の入隊者のために天幕をはって宿舎を設営する先遣隊に加わったのである。武器といえば、数名に一丁あての銃剣術用の木銃だけで、各自に支給されたのは、軍装だけにすぎない。

したがって、軍事訓練というのは、校庭を駆け脚で廻ったり、銃剣術の練習だけで、主たる仕事は、天幕をはってキャンプ生活の準備をすることであった。

そのような生活にも慣れてきた八月十日の夜半と記憶しているが、突如大音響とともに附近に爆弾が炸裂する無気味な振動音が、響きわたった。ソ連軍の参戦であった。

しかし、外部の世界とほとんど交渉をもたない隔離された集団生活であったから、戦況についてはもちろん、戦局がどのような方向に進みつつあるかも判らないまま、八月十五日が過ぎても、私たちは日本の敗戦を知らないでいた。

八月十五日にラヂオで重大放送があったらしいという噂さが、私たちの天幕生活にも傳わらなかったわけではないが、私たちの上官にあたる下士官が、「妄りに道聴塗説に惑わされてはならん。敵の謀略放送ということもありうる。」といって険しい表情をしたのでわれわれは、それ以上そのことについては触れないでいた。

はっきりと敗戦を思い知らされたのは、八月二十日も過ぎたある早朝に、上官から「本日、敦化飛行場にソ連軍の司令官が、わが軍の武装解除のために来ることに決した。詳細な指示は、追ってある筈だ。」という悲壮な傳達があった時点からであった。

その時点から、私たちの集団は、軍隊とはいえない存在となった。私のきわめて短い軍隊生活の経験からしても、軍隊生活は、運命共同体であって上官の命令とその権威は、高圧電流のように耳から脳に、そこから末梢神経に伝わったものである。ところが、ソ連の司令官が、敦化飛行場に降り立ったという日の昼休みの天幕内で、はやくも、こんな噂さが流れた。「わが隊の部隊長が、敵の司令官を出迎えるために、飛行場に駆けつけたときには、既に敵の司令官は、予定時刻よりも早く飛行場に降り立っていて、日本軍の責任者が不在であることを知り、激怒すると同時に、わが隊の部隊長の顔面にビンタの雨が降りそそいだ」というものである。この噂は、どうも作り話のようだが、星一つの初年兵が、おもしろおかしく皆んなに伝えてまわっても、下士官たちはもはや道聴塗説に類する噂話を制止するでもなく、みすごした。

そのようにして、軍隊のなかに権威と規律が、影を潜めるとともに、われわれのような召集兵のグループと古参兵のグループとでは、交しあう話題からしてガラッと変ってきた初年兵グループの話題は「内地に帰国できるのは、民間人が先か軍人が先か」ということと「どうしたらもっとも早くかつ安全に内地に還れるか」ということであって、そのことを明けても暮れても飽くこともなく繰り返して、一喜一憂したものである。

古参兵グループの話題は、軍隊生活の回顧をこめて軍籍にあった期間の長短をお互に語りあって、軍人恩給の胸算用に至ってこれまた一喜一憂するのであった。

その後の経過を簡単に説明すると、初年兵については、一日も早く除隊して民間人として早期に内地帰還を画策するのを有利とするグループとそれとは反対に軍隊にとどまって集団として行動するのが、安全にしてしかも早期に内地帰還ができると判断するグループとに岐れてしまって、除隊を希望するものたちは、あるいは堂々とあるいは秘かに集団から姿がみられなくなった。私も、そのようにして八月下旬に敦化から吉林までは、貨物列車の屋根の上に乗って吉林鉄路局の社宅に大学時代の級友三輪孝君のところに辿り着くことができた。

その後の約一年間は、新京で家族とともに「日僑俘」という資格で内地帰還を待つ身となった。

なお軍隊にとどまったわが戦友たちのその後の消息についても、後日戦友の一人から聞いたことを書きとめておきたい。

軍隊にとどまったグループは、九月にはいつてからソ連軍の指揮のもとで、敦化から吉林市に移動し、吉林市の郊外にあった豊満ダムという当時としては施設の点でも規模の大きいことでも東洋一を誇っていた水力発電所の施設を解体し、それを梱包する作業に従事させられることとなった。発電所の施設を貨物列車に積み込む作業が完了した時には、こ

れでやれやれソ連兵の指揮下を離れられると予期して疑わなかった由である。だが、列車に同乗させられたとき一抹の不安を前途に感じたものの、貨物列車が、吉林から北方を目指してシベリア鉄道に連結されているとは全く想像していなかったらしい。もともと軍隊にとどまったのは、その方が安全にかつ早期に内地帰還ができると見通したのであるから、そのように考えるのは至極自然なことであつたと思う。それだけではなく、敦化から吉林へ移動する際も、吉林から貨物列車に同乗を命ぜられた際にも、ソ連側は、わが戦友たちを身体検査をして、健康上の虚弱者と判断されたものは、同行を許されない処置をとったそうだが、それにたいする戦友たちの対応は、途中で集団から分離されることを極度に危惧して身体検査のあるという前日には、入浴したり軍装をきれいに整頓したり、ノミ・シラミのたぐいを退治するなどして、ひたすら検査に合格することを祈ったという。

人の運命などいうものは、岐れ途は紙一重だなあ、といったのは、その後シベリアで言語に絶する苦役に服することとなって、私より数年おくれて復員してきた戦友の述懐であつた。

そのような経過で、私は一年後に故郷の生家に引き揚げてきた。

その年の秋、ちょうど郷里の生家の裏山に松茸がとれる季節になって、大学時代から満洲時代にわたって、私がたいへん恩顧をかたづけなくした対馬俊治さん（故人）を郷里の家で迎えることとなった。

対馬さんの来意は、私に、田舎に引き込んでいないで上京せよ、そして研究生活を再開せよということであつた。

私は、そのような経過で、引き揚げてきた昭和二十一年の暮れには、ふたたび、東京で研究生活を続けることとなった。

(3) 東 京 時 代

私の東京時代の研究生活を、勤務した機関別にみると対馬俊治さんのおられた国民経済研究協会に、約七ヶ月、次に農林省の統計調査局の局長付きということになるかと思うが調査室に一年と六ヶ月、同じく農林省の農業改良局の経済研究部に二年と四ヶ月で、通算して四年と五ヶ月の間、東京で研究生活を送ったこととなる。国民経済研究協会時代に書いた原稿が、同協会の機関紙である「国民経済」誌に発表になったときには、既に私は、統計調査局に移っていたりしていたが研究したいと思っていた課題は、東京時代を通してあまり変らなかったので、席を置いた研究機関の印象をまず書きとめて、そのあとで一括して当時私が取り組んでいた課題について回顧することとしたい。

対馬俊治さんの勤めておられた国民経済研究協会の事務所は、国電のお茶の水駅から神田の駿河台の方に坂路を下ってゆくと、明治大学の構内にさしかかる一歩手前のところにあつた。四階と五階が、協会の事務所で、それより下の階には、政治経済研究所と中国研

研究所があった。奏玄龍さん（埼玉大学教授）石川英夫さん（農政調査委員会部長）らが、その当時政治経済研究所におられて厚誼を賜わった。

協会の農業研究部門には、私より先に、北京大学におられた西山武一さんが、研究生活に復帰しておられ、後に、農業総合研究誌に発表された「農業経済の循環図式」（上掲誌第二巻第二号 昭和二十三年四月号）のデータと取り組んでおられた。

私は、満洲の農業研究時代から引き続いて関心を持っていた課題について研究を継続したいと思っていた。研究の対象となる地域は、満洲から日本に替ったが、研究したいことは、満洲時代の継続であった。その点は、あとにまわすことにして、協会時代に親交を得た同僚を思いつくままに書きとめておこう。

京都大学の経済学部卒業で統計学専攻の木村太郎さん（国学院大学教授）金融論の専攻だったと思うが、フランス語も堪能な酒井一夫さん（北海道大学経済学部教授）、私よりはるか長く協会に残られた一橋大学出身の山田亮三さん、労働経済の専門の松尾均氏（日本女子大学教授）といった面々は、僅か七ヶ月の交友にすぎなかったが、なつかしく想い出される方々である。

協会で感じたことは、民間の研究機関というものは、経営を維持するにも、そのためにスポンサーを確保するにもたいへんだなあ、ということである。私が、協会を去って仙台に移つてからだと記憶するが、協会の創立記念に出版された協会史を贈られたがそれをみれば、歴代の協会の経理面で苦勞された方々のことも思い出されるが、私の在職中には稲葉秀三さんが、その方面（だけではないが）を担当されていたと思う。

私は、別段、協会ですることには不満があった訳ではなかったが、協会経理の健全化・合理化のためかと思うが、対馬・西山両先輩が農林省の総合研究所に移られるのと前後して、創設まもない農林省の統計調査局に移ることとなった。それが昭和二十二年の七月のことであった。

統計調査局の庁舎は、中央競馬協会の建物のなかにあった。場所は、現在も同じ所に競馬協会の建物があるが、いつの頃に新築されたのか、建物自身はその後見違えるように立派になって昔日の面影はみられない。

近藤康男先生が、初代の局長で、その下に課長として、加用信文さん久我通武さん福島要一さんらがおられて、加用君は、農家経済調査、農畜産物の生産費調査の画期的な改正に取り組んでおられた時代だったと思う。

久我、福島両氏もそれぞれ時代の要請を真正面から受け止めて、活気をおびておられた。私も、農業研究を志すものとして、農林統計には、浅さからぬ関係をもっていた。しかし、その当時は、統計の利用者としてであって、統計の生産者として、その製作行程にまのあたり接しえたのは、一年六ヶ月間統計調査局に席をおいたおかげであった。

統計の製作行程というのは、それ自身ぼう大な知識・情報産業であって、しかも、それは教育研究と同じような公共性と客観性を要求される事業である。どのような統計を生

産するかは、農業生産と経済とに深い学識と研究者としての修練を要する専門職が、企画立案にあたらなければならないことである。

しかも企画立案されたものを製作行程にかけて製品とする諸々の行程は、中央から地方を通じてぼう大な組織を必要とする巨大な事業所で実行される。各県に支社と出張所を必要とする事業体である。

私の在職中に昭和22年8月1日の臨時農業センサスという新製品が登場した。このセンサスは、時あたかも、農地改革の前夜にあたる農地の所有関係（地主・自作・小作の所有関係）を記録した貴重なもので、私もあとで触れる拙稿「小農経営の構造」でその点を強調しフルに活用させてもらった。

さらに、第一回の世界農業センサスという大きな事業も私の在職当時に、準備されていた。当時は、計算器といえば手動式のもので、コンピューターがあったわけではないので主に女子職員によって統計数字が集計計算される大部屋に一步足をふみ入ると加減乗除の計算器の響きがなりひびいて、マニユファクチュアだなあという感銘をうけたものである。

統計の作製という仕事は、企画立案の際になにをどのように統計によって表現するかは、一定の価値関心による選択によるが、一たん選択された課題をいかなる製品として実現するかは、さきの価値関心を極力禁欲して、客観性を要求される点で、学問的労作の生産行程における価値判断と推論過程・因果連関における客観性（知的誠実さと禁欲）の要求との関係に似ている。そのことを統計調査局で教えられたし、近藤先生、加用君は、その点でもっとも適任な専門家だと思っている。

さて、統計調査局が、近藤先生はじめ創設当初の方々の努力で軌道にのっている最中に私にはその間の事情がよく判らなかつたが、局が部に格下げされることになり、近藤局長は、職を辞されて東京大学に還られることとなった。そのあと私も、新設された農業改良局の経済研究部に移ることとなった。

経済研究部は、一時有楽町駅前の蚕糸会館にいたが、その後に、国会の近くの木造二階建てのバラック庁舎に移ったと記憶している。戦前は、農業技術の指導は農会技師の組織が担当してきたが、戦後は、連合軍の方針として、アメリカのエクステンション組織を手本として、研究機関、試験場、技術指導の三つの組織は、三位一体的であるべきだということになり、大学、農業試験場、技術指導普及組織の協同ということが、意識され強調されることとなり、そのような理由かと思うが、局長には東京大学の磯辺先生が、就任され、研究部の研究企画官も東大、千葉大などの教授が兼務されているのが数名おられた。

しかし、大学の方は文部省の管轄であったからいつとはなく、研究部のメンバーは、農林省にとどまるものと大学に移るものとに岐れてしまった。私は、研究と実地の技術指導とが緊密な連絡をもつことに賛成であったので、農業改良局の当初の構想が、いつとはなく立ち消えてしまったのを残念に思っている。

さて、国民経済研究会からはじまって、農業改良局研究部時代に続く約5ケ年間の研究生活において、私の研究意欲をかりたてた問題の一つは、満洲時代に仕残した仕事の継続であった。それは、農業経営の動態現象と家族構造の相関という問題と「主産地形成」の理論ということであった。個別経営レベル（farm level）では、経営組織の分化（専門化）と統合（複合化）の論理、経営規模（scale-economy）ということになるし、産業レベル（industry level）では、主産地形成論・農業立地論ということであった。対象とした作目は、稲作と果樹について実証してみることにした。

稲作については、佐賀県と新潟県の町村別の資料を使って稲作の中核的な地域の生産構造と中核地域の周辺部ないしは田畑作地帯の経営組織と生産構造とを取りあげた。統計調査局にいたことが大いに役に立って、統計資料の原票をあれこれ眺めたり、原資料を組み替えてみたりしているとそのこと自身が楽しかった。

果樹については、まず果樹地帯を視察することからはじまった。静岡県の庵原村、西浦村を見学し、和歌山県有田郡、愛媛県温泉郡、広島県の島嶼部といったところを廻ってみた。広島県の因島では極東裁判のA級戦犯の判決のあった日で、旅館のラジオ・ニュースで絞首刑（デス・バイ・ハング）というようなアナウンスの表現が、いまでも記憶に残っている。

残念なことに、稲作関係の資料と草稿類のほとんどすべてと果樹関係の報告書の草稿が農業改良局の火災のために一夜のうちに灰燼に帰してしまったことである。

朝出勤してみると私の居室であった木造二階建ての建物が、焼け落ちていたが、私の机とおぼしいものが、見うけられたが、出火の現場検証が済むまでは、現場に立ち入ることが禁じられていた。それでも、現場検証が済むまでの数日間が晴天ででもあればまだ焼けた原稿類のうちの幾分かは判読できる程度に残ったと思うが、立ち入り禁止期間になん回か降雨があつて、焼けて炭化した書類は、一塊の灰のかたまりとなってしまった。それでも辛ろうじて次のような資料として残されている。

経済研究資料第29号 青森県りんご経営地帯の生産構造は、青森県中津軽郡清水村の調査報告書であるが、同シリーズとしてぶどうについては山梨県の勝沼町と大阪府中河内郡柏原町を中心にしたものがある。

これらの調査は、昭和23年春と記憶しているが、東京大学と京都大学の農業経済学科卒業生が、公務員試験に合格してドット経済研究部に配属になったので、それらの諸君と農村に滞在しての成果である。想い出るままに名前をあげると、滝川勉、石原健、光永紀正、佐藤寿一の諸君である。この四君とは、農村における潜在失業人口の調査というので、新潟県の積雪地帯の山村と埼玉県下の二ヶ村も行を伴にしたことを思いだす。

経済研究部としての刊行物以外の発表機関に、私が単独で発表したものを加えておくと「落葉果樹園の経営」(新園芸落葉果樹特刊号)「商業的農業の経営の合理化——果樹」(ミカン・リンゴ園)を中心に——」(農業技研5の5)「農業経営と果樹作」(農業技術協

会刊「農業経営の理論と調査法」所収)の三篇は、夢中になって果樹作農業にとり組んだものとして、出来ばえのことは二の次としてなつかしい。これより少し時期的にはさかのぼるが国民経済研究協会時代から統計調査局時代に書いたものをあげると、「大農経営の構造」(「国民経済」昭和23年8月号)「中規模農民層の構造」(同上誌24年3月号)「小農経営の構造」(白鷗社月刊誌2巻4号)の三篇は、満洲時代から引きつづいてかかえていた課題の日本版といったもので、仙台に来てから「農業と園芸」に載った「農業経営と『家』の問題」(34巻10号)「農民層分解の経営的側面」(35巻1号)「農政と経営階層」(農業経済研究32巻2号)につづく同じ主題を追求したものである。

以上、農林省時代の五年間は、中央官庁の農林行政をそれも片鱗に触れたに過ぎなかったが、敗戦後の農政の変革期を肌で感じられた点でかけがえのない体験であった。

(4) 東 北 大 学 時 代

昭和26年春の新学期から、私は東北大学の農学部に移ることとなった。

講義をしたのは、主として農業経営学、農政学、畜産経済論の三つで、毎年度講義をつづけてきた。その間、宮城県立農業短期大学で、農政学を十年余、東北福祉大学で消費経済論を数年間つづけたことがある。

農業経営学については、私の主たる関心は、一般的にいて、農業経営主体の機能と組織の分化(ディファレンシエーション)と専門化(スペシャリゼーション)ということ、それと反対に作用する統合力(インテグレーション)と複合化(ディバーシフィケーション)ということである。産業レベルでは、農業立地論・主産地形成論となり、個別経営レベルでは、経営組織の決定機構と経営規模論(サイズ・スケール)ということになる。

いずれも、主として土地利用経営論的視角から課題をみて、主としてチューネン、ブリンクマンに学びながら、大槻正男先生の書かれたものが、いちばん参考になった。

農政学については、これはたいへんむずかしく、納得のゆくまでにはいたらなかった。農政学に直接的に参考になる著書というよりも、私の学問的興味から選んだ数名の先生の著作からたいへん教えられるところがあった。それは、大塚久雄教授、川島武宜教授、丸山真男教授、世良晃志郎教授といった方々で、以上の四先生の書かれたものは、読むことそのことが楽しくて、私の考えを文章にするには、あまりにも「農業経営学講座」という守備範囲から逸脱する分野に私の学問的関心は、はみだしすぎていた。その点については、後段で触れることにしたい。

畜産経済論については、この数年間の日本の畜産業界の刮目すべき発展現象に強い関心を持った。

ただ、肉鶏(ブロイラー)採卵鶏、養豚、都市近郊酪農のいずれもが、脱土地利用的産業化の方向にあるので、「土地利用経営」というよりも施設と労働力の利用経営論として

論じなければならない面が強い。私は、農業経営は土地利用、資本財利用、労働力利用の三方面からみななければならないと思っているので、その三面のうちのどの面にアクセントを打って論ずるかは、生産方向のいかんによるものと思う。畜産経済論に関しては、生産者、集荷業者、加工業者その他の関係者のうちどの層が、技術革新（innovation） シュムペーターのいう「新結合」の担い手であり、したがって超過利潤の受領者かといったことに研究の視角をおいて研究してきた。その結果は、いわゆる「総合商社」といわれる日本的な企業の実在形態に、すくなくとも興味をもって畜産経済論を構想してみた。

なお、農業改良局時代に研究機関と技術普及事業の連繫に興味をもったことと関連して、在職中に、農林中央金庫、山村振興調査会、全国農業構造改善協会等から研究費の供与をえて研究室の教職員、大学院学生、農業改良普及員の研修生、学部学生等と研究班を組んで、農山村に滞在して、せめても大学と農家との接触をもちえたことを記しておきたい。その点で、農林中央金庫在職中の鈴木辰雄先輩、山村振興調査会の井上実氏、全国農業構造改善協会の庵原文二氏以下の職員の方々のご厚意には、感謝の言葉もないほどである。

最後に、敗戦後の3～4年間の研究生生活の空白時代を除けば、大学卒業以来一貫して研究生生活を続けてこられたことの感慨をもこめて、私の学問的関心ということについて触れることで、この回顧の一応の締めくくりとする。

少々大上段に構えた論議に亘って気がひけるが、天文学的な何億光年といった尺度からすれば、人の一生などというものは、一瞬の出来ごとにはすぎない。しかし、短い生も一寸先のことは判らないという運命は、せめてもの救いであって、処刑の時刻が、刻一刻と迫っている死刑囚か、ガンの宣告をうけた場合以外には、死亡時刻が不定だということは、生命あるものにとって摂理だと思う。そこで何らかの方法で、自分の生命の結晶物が、死後にも残ることは、人間にとって魅力であるらしい。卑近な例をあげれば、子孫があとに続くこと、顕彰碑が後世までのこること、一生のうちになしとげた事業が残ることなどが思いつかれる。しかし、私は、そのようなことにあまり興味がないように生れついている。

残された二つの道は、何らかの意味で永生の根源と一体化するような価値理念を構築するか、結局同じことのように私は最近感じているが、人間社会の将来にたいして各自最適と思う構想を確信して、それを探求すると同時に、自分の生命をその実現に向って全力投球することによって、一瞬の生を長期化する生き方をとること。いってみれば「彼岸」に永生をかけるか「此岸」に希望を託するかのはあるが、主体的な価値理念であることには相異はないわけで、客観性はないといえるであろう。私のつたない研究生生活も、いってみれば、価値理念に導かれつつもその客観性を学問的にためしてみたいというようなことにあったと思う。その意味では、私の研究生生活は、きざな言い方をすれば「求道者」の途であって、書き残した文章を私自身読みかえしてみるのは、趣味にあわないので、

ましてや、他人に読んでいただくことなど考えただけで頬の赤くなることである。

学歴と研究歴・著作目録

学歴

明治42年（1909） 東京府豊多摩郡戸塚村大字諏訪6番地に7月11日生る
 大正11年（1922） 那加尋常小学校卒業
 昭和2年（1927） 岐阜中学校卒業
 昭和6年（1931） 岡山第六高等学校卒業
 昭和9年（1934） 東京帝国大学農学部農業経済学科卒業 続いて那須研究室研究生
 1ケ年

研究歴

昭和10年4月 南満洲鉄道株式会社経済調査会勤務
 昭和18年12月 業務の都合により退社
 昭和19年1月 満洲農産公社参事
 昭和21年12月 国民経済研究協会研究員
 昭和22年7月 農林省統計調査局勤務
 昭和26年5月 東北大学農学部教授
 昭和37年3月 農学博士（東京大学主論文 稲作生産の分化と地代理論）
 昭和44年4月～48年3月 東北大学農学部長
 昭和48年4月 定年退職
 東北大学名誉教授
 昭和48年4月 岩手県立盛岡短期大学学長

著作目録

I 機関誌に掲載

1. 農家経済調査の集計方法に就て	満鉄資料彙報	昭11年
2. 呼倫貝爾の植民	満鉄調査月報	昭11年
2. 蒙古人の農業	満鉄調査月報	昭13年
4. 満洲旗人の部落を訪ねて	満鉄調査月報	昭14年
5. 大農経営の構造	国民経済	昭23年
6. 中規模農民層の構造	国民経済	昭23年

7. 小農経営の構造	白鷗社雑誌	昭23年
8. 商品生産の発展と経営目標	農業経済研究	昭30年
9. チューネン地代概念の解釈をめぐって	農業経済研究	昭32年
10. 農政と経営階層	農業経済研究	昭35年
11. 稲作農業における商品生産と自給生産	農業経済研究報告	昭34年
12. 横畑護著「小農経営論考」	農業経済研究報告	昭34年
13. 稲作農業における商品生産と自給生産	農業経済研究報告	昭35年
14. 飯沼二郎・富岡次郎著「資本主義成立の研究」	農業経済研究報告	昭35年
15. 差額地代に関する諸問題(1)	農業経済研究報告	昭36年
15. 差額地代に関する諸問題(2)	農業経済研究報告	昭37年
17. 研究生活の回顧	農業経済研究報告	昭47年

II 研究機関内の刊行物

18. 農業移民計画の完成と既往移民の経営状態 満洲経済年報（昭和12年・上）	満鉄産業部編	昭12年
19. 満洲農業図誌「社会生活」	満鉄弘報課編	昭16年
20. 満洲の農業経営（東亜新書）	満鉄弘報課編	昭16年
21. 日本農業統計要覧（昭和12年—23年）	農林省統計調査局	昭24年
22. 日本資本主義の展開と農民負担（共著）	国民経済研究協会	昭24年
23. 農村財政に関する調査研究報告（共著）	農林省農業改良局	昭24年
24. 日本農業構造の統計的計測とその諸問題（共著）	統計研究会	昭26年
25. 青森県りんご経営地帯の生産構造（編著）	農林省農業改良局	昭25年
26. 大阪府ぶどう経営地帯の生産構造（監修）	農林省農業改良局	昭25年
27. 果樹経営地帯の生産構造（監修）	農林省農業改良局	昭25年
28. 農村における潜在失業の実態(1)（編著）	農林省農業改良局	昭25年
29. 農村における潜在失業の実態(2)（編著）	農林省農業改良局	昭25年

III 記念論文集への寄稿

30. 宇野弘蔵先生還歴記念論文集（下巻） 農産物生産費と自給現物		昭32年
31. 近藤康男博士還歴記念論文集 商業的農業の展開と地代範疇		昭34年
32. 磯辺秀俊博士還歴記念論文集 稲作生産による超費余剰について		昭37年
33. 錦織英夫教授還歴記念論文集 農業経営と生産力		昭41年
34. 桑原正信博士定年退官記念出版 山村調査の忘備録から		昭43年

- ## V 農業雑誌への寄稿

- | | | |
|--------------|-------------|------|
| 64. 出色の稲作農業論 | 農業構造改善 10の6 | 昭47年 |
|--------------|-------------|------|

Ⅵ 調査報告書（総括責任者として）

- | | | |
|--------------------------------------|------------|------|
| 65. 水田裏作の技術滲透普及をめぐる諸条件 | 農業技術協会 | 昭28年 |
| 66. 山村経済実態調査書（青森県三戸郡猿辺村）（林野営農利用篇第2号） | | 昭29年 |
| 67. 自作農創設維持資金に関する調査（宮城県古川市高倉地区） | 中央自作農協会 | 昭31年 |
| 68. 農地对価償還事情に関する調査 | 宮城県庁 | 昭32年 |
| 69. 農業経営における稲作の地位と構造 | 神奈川県庁 | 昭33年 |
| 70. 公有林野に関する調査資料 第9集 | 公有林野調査会 | 昭33年 |
| 71. 農業の利回りと組合金利のありかた | 農林中央金庫 | 昭37年 |
| 72. 農家の資金需要と農家の利回り | 農林中央金庫 | 昭39年 |
| 73. 農家の経営改善と組合金融 | 農林中央金庫 | 昭40年 |
| 74. 酪農の地域分化・階層分化と制度金融 | 農林中央金庫 | 昭42年 |
| 75. 新産業都市構造改善総合調査報告—常磐・郡山地区— | 全国農業構造改善協会 | 昭40年 |
| 76. 阿武隈山系農林業開発調査 | 全国農業構造改善協会 | 昭44年 |
| 77. 北上山系開発事業実施方式調査報告書 | 全国農業構造改善協会 | 昭46年 |
| 78. 出羽山系山村のすがたと進路—山形県西村山郡西川町— | 山村振興調査会 | 昭42年 |
| 79. 北上山系山村のすがたと進路—岩手県下閉伊郡川井村— | 山村振興調査会 | 昭42年 |
| 80. 奥羽山西山村のすがたと進路—秋田県仙北町西木村— | 山村振興調査会 | 昭44年 |
| 81. 羽前最上山村のすがたと進路—山形県最上郡船形町— | 山村振興調査会 | 昭46年 |

Ⅶ 雑

- | | | |
|------------------------|-----------|------|
| 82. 分郷移民と日本農村問題 | 新天地 18の8 | 昭13年 |
| 83. 満洲農業に関する覚書 | 満洲評論18の23 | 昭15年 |
| 84. 満洲農村風景 | 南画鑑賞 9の7 | 昭15年 |
| 85. 農産物の供給価格と生産費に就て | 満洲評論19の4 | 昭15年 |
| 86. 農業近代化論の一性格 | 満洲評論20の1 | 昭16年 |
| 87. 移りゆく九州農業 | 文明評論 9号 | 昭23年 |
| 88. 故細野重雄氏を偲びて | 総研月報 117号 | 昭33年 |
| 89. 孤軍奮闘 栗原百寿—その人と憶い出— | | 昭41年 |